

第1章 1994年度京都大学構内遺跡調査の概要

山中一郎 清水芳裕 千葉 豊

1 調査の経過

京都大学構内のほぼ全域には、縄文から近世にいたる各時代の遺跡が埋積している。このため、京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパス及び附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事に際して、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、発掘、試掘、立合にわけて実施している。1994年度には、以下の発掘調査4件、立合調査7件を実施した。

発掘調査	基礎物理学研究所研究棟新営予定地（北部構内 BF34 区）	（第2章，図版1-221）
	農学部農芸化学科等校舎新営予定地（北部構内 BF30 区）	（第3章，図版1-229）
	人間・環境学研究科校舎新営予定地（総合人間学部構内 AO22 区）	（整理中，図版1-220）
	文学部校舎新営予定地（本部構内 AX25 区）	（発掘中，図版1-230）
立合調査	北部グラウンド野外照明設置等工事（北部構内 BH36 区）	（図版1-231）
	農学部農芸化学科等校舎新営電気設備工事（北部構内 BG29 区）	（図版1-232）
	吉田グラウンド改修工事（総合人間学部構内 AQ21 区）	（図版1-233）
	環境保全センター施設工事（本部構内 AZ24 区）	（図版1-234）
	工学部研究実験棟新営その他工事（本部構内 AT29 区）	（図版1-235）
	理学部植物園入口受水槽設置（北部構内 BD34 区）	（図版1-236）
	病院地区基幹整備 中央診療棟取り壊し機械設備工事（病院構内 AF18 区）	（図版1-237）

2 調査の成果

前節で掲げた調査のうち、1994年度に整理を終えたものについて、その成果を略述する。なお、北部構内 BF34 区、同 BF30 区の発掘調査については、第2章、第3章でそれぞれ詳述している。

縄文時代の遺跡 北部構内 BF30 区で、縄文晩期の埋没林、貯蔵穴が検出され、多数の土器や石器が出土した。埋没林は、本調査区の東に隣接する BG31 区・BF31 区で検出された埋没林と一連のもので、扇状地の末端部分にとりつく流路内に保存されたものであることが明らかとなった。この流路斜面で、晩期中葉篠原式ごろの貯蔵穴を1基発見した。底面・側壁いずれにも意図的な施設は認められない平面楕円形の簡単な構造のものである。この穴

の中に、約2,000個のトチノキの実が外果皮を取りはずした種子の状態で納められていた。

本調査区が含まれる北白川追分町縄文遺跡ではこれまでの調査で、晩期後半の埋没林やヒトなどの足跡、中期末の住居跡などを発見している。こうした成果から、この地に居住した縄文人は、本調査区の東方の微高地上に住居をかまえ、その西側から北側の低地一帯を植物質食料の採集の場などに利用してきたと推測してきた。今回の貯蔵穴の発見はそれを裏付ける確実な証拠であり、この地に居住した縄文人の生業形態を復元するうえで、重要な資料である。

一方、BF30区から東へ200m離れたBF34区では、縄文時代の遺物包含層は認められたものの少量の遺物が出土したにとどまった。この地点は、遺跡の周辺部にあたると理解できる。北白川追分町縄文遺跡の広がりを復元するうえで、一つの手がかりとなろう。

弥生時代の遺跡 北部構内BF30区で、中期前葉の方形周溝墓を2基検出した。同時期の方形周溝墓は、本調査区の南西60mに位置するBE29区でも3基見つかっている。弥生中期前半の墓域が本調査区の西側周辺一帯に広がることを示す資料である。また、鍵層となる黄色砂は、周辺地点の調査で弥生前期末～中期初頭の堆積物と考えられてきた。今回の調査でも、黄色砂に覆われた土層から弥生前期後葉の遺物が出土し、黄色砂を掘り込んで中期前葉の方形周溝墓が造られており、従来の調査成果を追認する結果を得た。

古代の遺跡 北部構内BF34区で、平安時代前期から中期の溝、土坑、土器溜や多量の遺物が発見された。平安前期の資料は、京都大学吉田キャンパスにおけるこれまでの発掘調査では、乏しかったものである。とりわけ溝SD45の一角からは、一括廃棄されたと思われる多量の土器、陶器が出土した。9世紀後半のうつわの構成を明らかにするうえでの重要な資料になろう。文献との比較検討により、これらの遺構や遺物は、藤原基経の別業「山庄」あるいはそれから発展した円覚寺に関連するものとみるのが有力である。北部構内に残された平安時代の遺跡については、従来、吉田寺との関連が考えられてきたが、新たな検討課題が加わったといえる。またBF30区では、10世紀後葉ごろの木棺墓の可能性のある土坑が検出されている。墓の可能性のある土坑はBF34区でも見つかっている。

中世・近世の遺跡 BF34区で、中世前半の砂取り穴、中世後半から近世の道路遺構、近世の耕作にかかわる畝溝がみついている。またBF30区では、11世紀から13世紀前葉ごろの東西および南北にはしる多数の溝を検出した。同様の溝は、東に隣接するBF31区でもみついている。これらの資料は、中世以降における北部構内の土地利用の変遷を明らかにするうえで、重要な材料となろう。